

北陸大学ライブラリーセンター報

Bulletin NO.28

⇒ をクリックすると本文がご覧になれます。

⇒ 第9回 北陸大学読書感想文コンクール
読書感想文コンクールによせて

鍛治 聡
(審査委員長・薬学部准教授)

⇒ 《優秀賞》
『明暗』を読んで

舟野 麻実
(未来創造学部 未来文化創造学科 3年次生)

⇒ 《優秀賞》《ベスト・タイトル賞》
人は悲しい、優しいほどに

中野 さくら
(薬学部 薬学科 3年次生)

⇒ 《優秀賞》
『山月記』を読んで

森永 光
(薬学部 薬学科 1年次生)

⇒ 《優秀賞》
『チーズはどこへ消えた？』
～Who Moved My Cheese?～

上田 弘子
(未来創造学部 未来文化創造学科 3年次生)

⇒ 《優秀賞》
捨て去られた愚民たちの抗争
—『立喰師列伝』の世界

ヨウ オン ウ
楊 恩 宇
(未来創造学部 国際教養学科 2年次生)

⇒ 目次

HOKURIKU UNIVERSITY LIBRARY CENTER

北陸大学ライブラリーセンター報



第9回 北陸大学読書感想文コンクール

読書感想文コンクールによせて

審査委員長・薬学部准教授 鍛治 聡



本年は314編の応募があり、4名の審査員で122編から最優秀賞1編、優秀賞4編、佳作5編、努力賞21編の計31編の作品を選出させていただきました。ここに改めて、多くの作品に応募していただいた学生諸君、一次選考で学生さんの作品の熱心な読者となっていたいただいた担任の先生方、そしてポスター作成にはじまり、作品の受領、集計、表彰式の舞台設定まで支えていただいたライブラリーセンターの皆様にもこの場を借りて御礼申し上げます。また、不遜とは思いますが、我々審査員一同はそれぞれが誰にも負けない世界で最も熱心な皆さんの作品の読者であったと自負しております。

応募された作品群は、昨年に引き続き、明治から昭和期にかけて近代日本文学の礎となった太宰治、芥川龍之介、夏目漱石、川端康成といった巨匠の作品が数多く手に取られていたようです。その中であって辻秀一さんの『スラムダンク勝利学』が巨匠と肩を並べる読者数を獲得しましたのは、著者の話を直接伺う機会があった効果のなせる技かと考えております。その作品群の中で大きな特徴は、夏目漱石さんの『こころ』を読んだ応募が16編あったということであり、そのうち4編が努力賞までのベスト31に入ったということです。加えて、表彰作品の3分の1近くが“心”を題材とした作品であったことでもあります。それだけ“心”の問題は社会の関心が高いことでもあるということなのでしょう。そして、最も大事なことは、『こころ』16編のうち審査で目を通す機会があった9編が全て異なる視点、表現であったということでもあります。まさしく、十人十色であり、万人に届く思いは共通であれども、捉える感性は人の数だけあり、表現の細部にいたるまでの共通する感想はありえないという事実を雄弁に物語るものであったと思います。

話は変わりますが、コンクール期間中に「課題となる本を定めて欲しい。読書感想文を書くには、まず本を読まなければならない。本を読むからには、感想文が書ける本でなければならない、感想文を書くにいたった本に行き当たるまで6冊も本を読まざるを得ず、時間がかかって仕方がなかった。時間の無駄を省くためにも、課題図書^(註)を1冊だけ指定してくれるとちょっと応募が増えると思う」との話を耳にしました。これはこれで大変であった本音であろうと思いますし、良くぞ辛抱強く選書に励んでくれたと思います。しかしながら、これもまた読書感想文コンクールの果たす大きな役割の一つなのです。あ

またの本から気に入った作品を選び、読み、咀嚼^{そしやく}し、自分の物として発表作品を仕上げる。ですから、感想文コンクールに応募された作品数は314編ですが、期間中にこの数倍の本が読まれ、学生さんの血や肉となったのであろうと思います。そして、単位と関係ないからと本を手取ることもなくということは全くなかったと信じております。

改めて言うまでもありませんが、本を読んだことで自身に得られたことを書いてあることが審査のポイントとなります。自分の感性に触れた事柄を素直に書き出してあること。本の荒筋を抜き出しただけの文章との区別が、審査する立場としては実に微妙なところであります。例年、この区別が私にとっては悩みどころ。よくありがちな作品として、本の荒筋を書き連ね、それぞれにコメントというか、その部分ごとに評論を加えている作品。読書コメント大賞応募作品としては良いのでしょうかとの思いを抱かせる作品は、それはそれで熱意をこめて仕上げた作品として尊重するも、感想文とは違うのではないかと私は思います。全般にわたる荒筋を非常にうまくまとめてある作品については、本を読んでみようという気にさせてもらうこととなりますが、さらにもう一步踏み込んで欲しい。読み取ったことを素直に書き綴る。その段階で、本の抜粋から自分の言葉に置き換わっている。そうであるべきと思います。そこに、感情移入がなされていることがうまく表現されていること。考えがまとめてあること。意思が見え、主張がなされていること。得たことが書いてあり、さらに伝えようとしていること。最優秀、優秀、佳作のいずれの作品にもこのどれかに当てはまっていたはずですが、公平に審査したとの自負はありますが、個々の作品を捉え、論評、講評する能力は全く持ち合わせていないので、作品群については皆さんでライブラリーセンター報にて公表される作品を読んでください。大いに参考になるはずですが、これは担任の先生方にもお願いします。公表されている優秀作品を読み、そして次年度のご自身の担任学生へのアドバイスをよろしくお願ひしたいと思ひます。担任の先生は、誰よりも熱心な読者のはずなのであります。

(注) 課題図書は、「読書感想文コンクール推薦図書」として、ライブラリーセンター本館1階および薬学部分館3階に別置してありました。



入賞者と審査委員の皆さん

表彰式は平成22年1月19日(火)、ライブラリーセンター本館ソフィアラウンジで行われました。

入賞作品

📖 最優秀賞	『明暗』を読んで	舟野 麻実	(未)	3年
📖 優秀賞	人は悲しい、優しいほどに 『山月記』を読んで	中野さくら	(薬)	3年
	『チーズはどこへ消えた?』～Who Moved My Cheeze?～	森永 光	(薬)	1年
	捨て去られた愚民たちの抗争～『立喰師列伝』の世界	上田 弘子	(未)	3年
		楊 恩宇	(未)	2年
📖 佳作	少女七竈 ^{かまど} と七人の可愛そうな大人 『「従軍慰安婦」にされた少女たち』を読んで	中原 千恵	(薬)	3年
	遠いやら近いやら	辻口いつか	(未)	3年
	『学びの構造』を読んで	黄 曉玲	(未)	3年
	生きるとは?	劉 長紅	(未)	2年
		櫻井 一恵	(未)	1年
📖 努力賞	『こころ』を読んで	山本 陽子	(薬)	3年
	こころの中の存在について	白杉有律紗	(薬)	2年
	心との会話	中川 有衣	(薬)	2年
	右の頬を打たれたら左の拳を	松浦 純児	(薬)	2年
	「答え」	佐々木千嘉	(薬)	1年
	迷走のすすめ	白尾 蓉子	(薬)	1年
	『河童』を読んで	柳瀬明日香	(薬)	1年
	シュレーディンガーの才能に触れて	渡部 千波	(薬)	1年
	私が「something great」と出会う瞬間	張 逸嫻	(未)	3年
	『夜と霧』を読んで	北村 真理	(未)	3年
	強いこころ	王 笑雪	(未)	3年
	心の弱さと強さ	杜 倩	(未)	3年
	「やさしい」ってどういうこと?	伊東 誉道	(未)	2年
	裏方。	三上 健太	(未)	2年
	『天国の郵便ポスト』を読んで	林 昇吾	(未)	2年
	『チーズはどこへ消えた?』を読んで	小野 麻衣	(未)	2年
	ノートが教科書	佐藤 真央	(未)	1年
	『坂の上の雲』を読んで	石川友佳子	(未)	1年
	なぜ「一分で伝える技術」は重要なのか	張 柏ハン	(未)	1年
	フランツ・カフカの『変身』を読んで	南 明世	(未)	1年
	～知るべきことを知ったときのあの苦々しい微笑			
	『賢人の知恵』を読んで	山田 昇汰	(未)	1年
📖 ベスト・タイトル賞	人は悲しい、優しいほどに （『こころ』の読書感想文）	中野さくら	(薬)	3年

* (薬) は薬学部、(未) は未来創造学部です。

* 応募者の皆さんには、参加賞としてプリペイド・カードをお渡ししました。

* 今回の読書感想文コンクール応募者の皆さんが読んだ本は、ライブラリーセンター本館1階の読書コーナーに別置してあります。

最優秀賞

『明暗』を読んで

未来創造学部 未来文化創造学科 3年次生 舟野 麻実



書名 明暗

著者 夏目 漱石

この小説を読む時に、逐一、登場人物の心理の裏まで掘り下げて検討していくと、深みにはまってどうしようもなく、およそ解決できそうに無いことに頭を抱えて文章を追う前の気持ちに二度と戻って来れなくなりそうな感覚に陥る。それは憂鬱でよどんだ気持ちにさせる。一方では、時折あるユーモアや登場人物の無茶苦茶な言い分に面白可笑しい気持ちになる。この小説には、人の心を掴んで離さない不思議な魅力がある。私がこの本から学んだことは沢山あり、ここでは特に津田という一人の男について意見を述べたいと思う。

津田は、吉川夫人が言うに「学問をした方」と評される人であった。学問ができるばかりにと言うと無理があるかもしれないが、よく思考するほうではあった。しかし考えるばかりで優柔不断なところもあった。吉川夫人の提案に押されてしまったのは、結局一方では自分の心を自分で知りたいというような気持ちが働いたからではないだろうか。昔の恋人の清子に会って、何故自分の前からあつという間に消えたのか。その理由を今の自分に捉えさせるのは、過去の自分によりやく納得を提供できるかもしれないと無意識に思ったからではないだろうか。それは彼の前にあった世間体を取り払って、過去の自分を見つめ返すような試みであると言えるだろう。表向きは、吉川夫人がけしかけて、彼を清子のもとへ向かわせたように書かれているが、彼の心の水面下には常に疑問があつて、気になって仕方なかったのだろうと思う。それをこの機に乗じて、清子に会うことで解消しようとしたのではないだろうか。長年こうした気持ちを押し殺し、延子と暮らし続けたが、彼からはどうとも動かず体裁を保っていた。延子の方もそんな彼をおかしいと思いつつ、彼から愛されることばかりを念頭に置いていたから、却って清子の方へ向かわせる条件が揃ってしまったのかもしれないと考えた。

妹のお秀や吉川夫人から「お延を愛しすぎる」と言われる程には、お延を愛していなかった彼は、平生から愛に関し大きな矛盾を抱えていたと言える。それがずっと続くものだから、その状態に彼自身が麻痺したような感覚に陥っていたのだろうと思う。それは、知らずに自分自身を騙すような感覚に近いのではないだろうか。少しずつ、しかし確実に内側から自分を騙していくと、しまいには自分で自分が分からなくなる。自覚の質が変わってしまう。自分でそのことに気が付かない程になると、他人に指摘されるまで真実の隠れ蓑になってしまうのだろう。自分でどうにも判断が付きなから、吉川夫人という他人に決断を預けてしまった。これは、考えようによっては危険なことである。たとえ冷静に考え下した判断だったとしても、自分の手に負えないものを、相手に譲渡するということは何を意味するか。一見すると吉川夫人は第三者に近い立場と錯覚しやすいが、津田と清子の縁談をまとめようとした当事者であることを考えれば、双方に及ぼす影響力は大きいと言える。『明暗』は、津田が清子と会ったところで終わっているのだから、吉川夫人が何らかの謀の上に彼らに乗せて、その結果に一喜一憂する人物であれば、物語の流れは二転三転すると思う。私は、何故津田に「今更会ってどうする」という考えが、大した効力を発揮しなかったのか不思議に思った。彼の中にもともとあつた疑念を解消したいという潜在的意志の為と、吉川夫人の後押しの前に屈服してしまったからだとしたら、残念に思う。

ところで、学問をするように疑問を追及するという目的で、人間を考えて良いものだろうか。人間関係を考える時、これはまるで当てはまらないと思う。疑問は必ず解決しなくてはいけないのか。知らなくて良いこともあると思う。自分の感情より優先すべきものがあるとしたら、上手くいくかは別として、津田はそれを守るべきだったと思う。しかし、彼がこだわったのは自分の思いや考えであった。つまり、

自分を一番に愛したと言えるのではないか。人の意見に便乗して、責任の所在が宙に浮いたように見えても、自分という実体のある器は無くせないのだから、清子に会いに行くのはお延に対し不誠実であり、軽率であると思った。いつかこのことが贖罪となって津田の前に跳ね返ってくるのではないかと考えた。

また、難しいことだが、人を試してはいけないと思う。自分の理想や望みを相手に振り掛けて、思う方向へ行かないと憤慨したり地団駄を踏むのは片腹痛いことには相違無いからだ。そして、自分だけを愛すのもどこか不自然なものであると思う。人が自己本位であるのは、ある種仕方ないと言えるが、理性で現実と調和させることはできると思う。少なくとも、その為の努力はできるものだと思う。それは必ずしも妥協を意味するとは限らないと私は思いたい。その視点に立つことができれば、卑屈になる必要は無いからだ。むしろ、その状態を生み出し、維持することを誇りとすべきであると思う。

人の心は、自分勝手な憶測や、その人を取り巻く事実関係等だけでは到底分からない特殊なものだと思う。自分自身の心さえ自分で把握しつくすことはできないのだから。不確かで、繊細で、曖昧な、どこまでいっても漠然としたものだと思う。そのことを考慮して、この小説を読むと、意図せず驚くべきことに気付いてしまった。誰もが津田であり、吉川夫人であり、その他の登場人物であると言えるのではないかという事実である。なり得るというわけではなく、「である」が正しいと私は考える。誰が善で悪かということでは決してない。ただ人間とはそういうものではないかということ、漱石は少しは読者に問いかけたかったのではないかと思う。それほど人間は複雑であり、また複雑という言葉で括れるほど単純なものなのかもしれないと思う。だからこそ『明暗』の中に見え隠れする人の思いや、人そのものの在りようが、読む者の心にどこまでも浸み込むのだと思う。そのことと、この小説が未完であることが、『明暗』の最大の魅力となって表れているのだと思う。

最優秀賞を受賞して

舟野 麻実

受賞の知らせを聞いたときは、ただ目を丸くするばかりでした。この本と格闘し、ようやく読み終えた頃には夏休みのほとんどを使っていました。がっかりしていた自分に、やっとお疲れ様と言えそうです。寝っ転がって読める本が良かったなあと思いながら、ああでもないこうでもない様々なることを考えるのは意外に楽しく、何かに没頭出来たということでは良い経験だったと思います。授賞有難うございました。これからも本との出会いを大切にしていきたいと思います。

審査委員から一言



審査委員
小林 忠雄
(未来創造学部教授)

一つの主張を盛り込んだ文章には、「起承転結」という文章を読みやすくするための構成上のルールがあるが、これは弁舌とか何らかのプレゼンテーションを行うときも同様である。そして問題とかテーマ（テーゼ）が明確に認識されていなければ、筆者もしくは話者が最終的に何を言いたいのか、何を主張したかったかが判然とせず、きわめて曖昧なものになってしまう。したがって優れた書き手は優れた話者であり、弁論者となる。現代社会は情報が絡み合い、さまざまな感性の世界もデリカシーで複雑なため、なかなか自分の考えや意見を明確に相手に伝えることが困難になってきている。換言すれば、より細やかな表現力を持たなければ、今日のような競争社会には勝ち残れないのだ。そのためにも学生時代に沢山の本を読み、知識やポキャブラリー（語彙力）を豊富に持った人間力を必ずや身につけて欲しい。今年もとても良かった。

優秀賞

ベスト・タイトル賞

人は悲しい、優しいほどに

薬学部 薬学科 3年次生 中野 さくら



書名 ころ

著者 夏目 漱石

出版社 新潮社

人間というものを追求していけば、終わりなどどこにもないだろう。一般論に値する人間は数多くいるだろうに、ひとつの答えにまとめるには、どうも難しそう。結局わたしもなんとなく生きている。一応“生きる意味”なんていうものを考えてみる時間もあったけれど、納得のいく答えなんてどこにもなかった。しかし、この夏出会った『ころ』という作品は、わたしにもう一度考える時間を与えてくれる素晴らしい作品になった。

この物語は、私、先生、そしてKから成り立つ物語である。最終的に先生とKは自殺という手段を選ぶが、この結末に人間の中にある本当の恐ろしさを、わたしは感じられずにはいらなかった。

恋というキーワード越しに先生とKの関係を見ていくと、そこには強烈なる“エゴイズム”が影を潜めていた。

Kを失うことで恋人を手に入れた先生。失うつもりなんてなかったのだろう。しかしながら、誰かを愛するということは、誰かを傷つけてしまうという事なのだと思えて仕方がない。そう解っていながらも、人間の欲望というものには底を知らなくて、それでいて自分が傷つく事を恐れている。先生が生んだこの結果は最悪だが、妥当だと思ってしまう自分に驚いた。わたしもそんな人間。自分の利益に素直な人間だ。何よりも大切なものが、何よりも簡単に壊れていく風景に、わたしはただただページを進めるしかなかった。

先生はこの罪悪感と共に死んだように生きていくのだが、その姿はあまりにも悲しかった。自己否定でしか生きていけない。またそれもエゴ。自分を責めるということは、他人を責めるよりはるかに楽だろうと思うからだ。

妻はそんな先生に寂しさを覚えていた。「死んでいく自分の記憶を純白のままにしてやりたい」などという先生の思いは正しくエゴイズムで、そして“先生の気持ちを理解したい”と思う妻の気持ちも、美しくみえて実は、エゴイズムなのではないかと思ってしまう。しかし、この二人の間にあるエゴイズムは一種の“愛情”とも呼べるだろう。互いが互いを思いやり、お互いの未来が少しでも素敵なものになれば…という優しさの結果だと思う。

そしてその“優しさ”は、登場人物すべての人の中にあっただ。先生を思って死んでいったK。真実を打ち明けるでもなく、正直さ故の死に胸が痛んだ。きっとわたしにはそんなカッコいい事なんてできないから。だからこそ、Kの死は私の胸を痛めるには十分すぎた。

私は思うのだ。上手く生きられなかった人は悲しいと…。何も気にせず普通の恋愛をしたのなら、当然このような結果にはならなかっただろう。しかし、何にでも理由を求め、その答えが見つけれずに苦しむしかない人達は、まれに死を選んでしまう。皆が皆優しいから、最善の方法が自分が居なくなる事だと思ってしまう。自分が居なければ、問題は起こらない。そんな風に考えてしまう。——優しいけど、それは違うのに。

どうして簡単に生きていくことができないのだろうか？難しく考えすぎていて、本質はもっともっと単純なはずなのに。もたれるものが無くなれば、悲しみにさえもたれなくなるこの人間の性質は、今も昔も変わらないのだろう。何より、エゴイズムに翻弄される姿は、いつの時代も見苦しい。“エゴイズム”という言葉こそ、最近出てきたような洒落たもののように思えるかもしれないが、きっと先祖代々、人間に埋め込まれたDNAとしてわたしたちは持ち合わせているのだと思う。盾つくこともできなかった時代があったとして

も、きっと胸の中にしまい込み、“そういう感情は有り得ない”とでも思い込ませていたのではないだろうか。時代の変化と共に、それが露になってきただけの話であって、やはり今も昔もそう変わりはない。

だけどわたしは信じていたい。本当は憎めないほど、人は優しいんだと。優しさ故に、たくさんの犠牲があるのだと。複雑に絡み合った感情を眺めながら、いつしかわたしはそんな風に考えていた。

夏目漱石が残したこの寂しがりやの言葉たちは、わたしの頭をフル回転させてくれた。漱石の生い立ちや、時代背景などを調べてみると、まるでこの作品自体漱石の人生なのでは？と思わせる部分があったが、わたしは結局一番疑問に思っていることを解決できないまま本を閉じた。

それは最初の一行から始まっていた。

「私はその人を常に先生と呼んでいた。だから此所でもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。」

“書くだけ”というフレーズがどうにも引っかかる。

先生の遺書の最後は、

「あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、凡てを腹の中にしまっておいて下さい。」

とあるのに、私は誰宛にこの事を話そうとしているのだろうか？それがわたし宛なら、喜んで読んでみせよう。

優秀賞を受賞して

中野 さくら

受賞の連絡を受け、驚きと感動で手が震えました。この自分の手から生まれた言葉を読んでいただけで満足だと思っていたので、それがこのように表彰していただけることを、大変光栄に思います。うまいことは何も言えません。ただ私が思う「本」という物質は、人の心を豊かにしてくれます。時には不安にさせ、時には難題を与え…私の勉強している何倍もの時間を費やしても解かれることのない、永遠の問題集のような。だからこそ面白いのです。読書という孤独な時間の中には、作者との会話があります。皆がこの楽しみ方を知っていれば、私は戦争なんてなくなる気がする…そう思えてなりません。

最後に、この感想文を読んでもらった皆様、そして、『こころ』を生み出した夏目漱石のすべてに、感謝申し上げます。ありがとうございました。

審査委員から一言



審査委員
福山 悠介
(未来創造学部講師)

メロスは激怒した。

こう、太宰治『走れメロス』は始まる。私は子供の頃この本を読み、そして激怒した。メロスが王を王でないと言うならば、彼の友情は友情ではない、と。そして悩んだ。ならば友情とは何か。黒武洋の『メロス・レヴェル』という小説、その舞台では「友情」に賞金がつく。友情は証明できるものなのか、そしてその価値はいかばかりか。

メロスの友情には今でも納得がいかない。友情とは何か、今でもよく分からない。それでも思う。私は、彼のおかげで友情という感情を得たのだ、と。

感動するだけが心じゃない。怒り、嘆き、悩み、苦しみ、悲しみ、憤り、そして考える。考え続ける。容易には出ない答えを探し、問い続ける。本を読むことは、考えることなのだと思う。

皆さんにも良い本との出会いがあらんことを。読書感想文コンクール受賞者の皆様、おめでとう。残念ながら落選された方々、また、本を読もう。

優秀賞

『山月記』を読んで

薬学部 薬学科 1年次生 森永 光



書名 山月記

著者 中島 敦

出版社 新潮社

高校生の頃に国語の授業で学んだ、『山月記』に再び手を伸ばし、読み返してみました。

私は当時、李徴を、自尊心の強い性格によって虎の姿になった、哀れな男として見るばかりで、李徴に対して特別な感情を入れることをしませんでした。再び読み返した今、李徴の裏に隠された心理を読み解くことで、この物語には李徴という男を通して読み手に訴えたいものがあるのではないかと考えるようになりました。

李徴が虎になったのは、自尊心の強いその性格のために自分の才能を過信し、自ら進んで努力することを怠ったためだと思っていました。しかしそれだけではなく、その根本に人との交わりを避けるまでになった彼の臆病な心が大きく関わっていたことを知りました。

「人間はだれでも猛獣使いである」、つまり、人間はだれでも抑え込まなければならない厄介な性格や性質を抱えています。李徴には、虎になった後に自身でも分析していますが、その自尊心の強い性格の裏に、自尊心が傷付けられることを極度に恐れ、恥をかくことを避けるために尊大に振舞おうとする、臆病な心が隠れていました。人と交わり合うとき、私たちはその厄介な性格や性質を自ら制御することで、円滑な人間関係を保とうと努めます。それはもちろん容易なことではありませんが、他者との関わり合いの中で、自分がどのような存在であるのかを見出し、自分を見つめ直し、さらに磨いていくことになるのだと思います。

李徴は自分の性情を上手くコントロールできなかつたために、他者との関係を絶ち自らの臆病な心から目を逸らすことで、自己を保とうとしたのでしょう。しかしその結果、李徴は才能はあったものの、詩人として成功することは叶わず、遂には発狂し、虎の姿となってしまいました。旧友の袁愔は彼の詩について、「作者の素質が第一流に属するものであることは疑いない。しかし、このままでは、第一流の作品となるのには、どこか（非常に微妙な点において）欠けるところがあるのではないか」と評価していました。それが何であるのか具体的には書かれていませんが、私は袁愔の言う、「どこか欠けるところ」とは、人間としての自分を磨いている程度なのではないかと考えます。人とよく交わり、自分を成長させている人には高い技術があることは勿論、気持ちに余裕が生まれ、微妙ながらもそれが詩の中に表れてくるのではないかと思います。李徴の臆病な心は、人との交わりを避けることで制御する必要はなくなりましたが、その分、自分の弱さと向き合いながら自分を磨いていく機会を、自ら捨て去ることになってしまったのだらうと思います。李徴よりもはるかに乏しい才能であったにもかかわらず、自分の作品や自分自身と向き合い、専一に努力したために立派な詩家となった者たちを見て、そう感じました。

李徴のような臆病な心を内に秘めた人は多いように思います。私もその一人だろうと思っています。私は自分で自尊心が強いとは思わない、むしろ自信がないのが悩みではありますが、時に恥をかきたくない、自分の弱みを見られたくないとの思いから、無意識に自分を抑え込み、人との距離を少しおいたり、距離を縮めることを拒もうとすることがあります。

しかし、どんなに人と交わるのを煩わしく思ったり、苦しいことだと思っても、人間として生きる上で他者との関係を絶つことはなかなかできず、むしろ自分が気付かないうちに自然と他者を求めているものだと思います。李徴も叢の中で旧友の袁愔と出会ったとき、自分の胸の内を分かっ^{くまわ}てほしいとの思いから、袁愔と言葉を交わしたいという願望が湧き上がってきました。虎の姿になる前も、自分を理解してくれる

人がいたらと思っていたに違いありません。

人と交わるということは、自分の心と正面から向かい合わせ、落胆させることばかりではなく、支えられたり、互いに切磋琢磨し合う喜びを感じさせてくれるものだと思います。私たちは独りでいたい、独りの方が楽だろうと思いつつも、だれかがいてほしい、だれかに気持ちを分かってほしいと願う矛盾を抱えながら生きているのかもしれない、この物語を読んでそう考えました。そして家族や友人を大切に、自分をさらに成長させることができるよう、自分自身と向き合いながら有意義な大学生活を送っていきたいと思いました。

優秀賞を受賞して

森永 光

優秀賞に選んで頂けたことを嬉しく思うとともに、大変感謝しています。本を読み、感じたことや考えたことを自ら進んで文章にして表現することはなかなかないのですが、感想文を書く中で本と向き合い、自分と向き合う有意義な時間を過ごすことができました。また、一度読んだことのある本でも、前回読んだ時と違う感じ方をしている自分を発見し、そこにその本の面白さや自分の成長を感じることができるのが分かり、この経験を機に、本でより自分を成長させていきたいと思いました。

優秀賞

『チーズはどこへ消えた？』 ～Who Moved My Cheese?～

未来創造学部 未来文化創造学科 3年次生 上田 弘子

書名 チーズはどこへ消えた？

著者 スペンサー・ジョンソン

出版社 扶桑社



この物語は2匹のネズミと2人の小人が最高のチーズを求めて、日々迷路を探検するという内容であった。彼らにとって「チーズ＝幸せ、食料」なのだ。私たち人間にたとえてみるとチーズは「安定した暮らし、家庭、健康」などなのである。つまり、求めているものなのだ。

この物語を読んで人間には2つの心があることを知った。まず1つは「単純」な心。日々の生活の中で変化していくものに対して、素直に受け止め臨機応変に対応しようとする心である。2つ目は反対に変化していくものを受け止めきれずに、なぜそのようになったのか分析し、変化前のものに執着してしまう「複雑」な心。人間なら誰もが持つ、この2つの心のバランスによって物事の考え方や気持の持ちようが変わってくるという事を教えてくれた。

私の性格はどちらかと言えば複雑な部分の割合が大きかった。頭では単純に考え見切りをつけられたらどれ程に楽だろうと感じていたものの、最終的には変化することを嫌い、変化前のものに執着してしまう傾向があった。なかなか新しいものや状況を受け止めきれなかったのだ。

例えば、高校時代の私である。この頃の私は打ち込める事もあったし、楽しく感じる瞬間も多々あった。しかし何か物足りないという思いも同時に抱いていた。なぜなら、あまりにも中学時代が楽しかったために「中学ほど楽しい瞬間はない」と思い込んでしまっていたからである。あまりにも居心地が良かった過去に執着してしまい、新しく変化した状況を受け止められずにいた。この思いが自身の高校生活をダメに

していたんだと、この本を読んで久しぶりに思い出すことができた。

しかし大学生になり、こんな事に執着し続けていても無意味だと気付くことができた時は、一気に何か
が楽になった。

そうと言って、この複雑な考え方をしてしまう性格がすぐに状況に応じた考えが出来る単純なものに変
わった訳でもなかった。人間は難しい。

去年の留学時に多くの新しい状況変化が私を追い込んでいった。頭では切り替えなければと分かっている
ものの、気持ちが追いついていかずに複雑な思いに苦しんでいた。

しかし、ある変化を機に私の考え方は変わった。状況に対応しようとする単純な心が変わったのである。
その瞬間、何もかもが新鮮に感じた。今まで自分を苦しめていたものに対してバカらしくなった。そして、
一皮むけた自分が今までの自分の中で一番いきいきしていた気がした。

「変わらなければ破滅することになる」

この本に出てくる言葉の一部である。

自分も2つの心を持つ人間だ。当たり前前に未だ、執着している考えもある。

しかし、変わること、見方を変えることの素晴らしさを留学中に私は知った。変化した新しい領域に踏
み込んで得ることがあるということを知った。それ以来、複雑な心が現れても、気持ちが追いつくことが
出来なくても、頭の中の考え方だけでも変化していく状況に対応していこうという思いがある。今後も多
くの変化と向き合わなければいけない時に会っていくだろう。その時はまた、自分の置かれた状況を知り、
何かにとらわれることなく行動していける人間になりたいと感じた。簡単なようで難しいと思うこと
をこの本は再度、私に考えさせてくれた。

優秀賞を受賞して

上田 弘子

私は、小学生の頃から作文や感想文を書くことを苦手としていたので、今回の受賞は予想外の結果
でした。感想文を提出した時は、参加賞がもらえればいいと考えていたので、とても嬉しいです。

これを機に自分の文章力に少し自信を持つことが出来たので良い機会だったと感じています。あり
がとうございました。

審査委員から一言



審査委員
八木 健太郎
(国際交流センター准教授)

大学で卒業論文を書いているとき、指導教官にちょっと変なことを言われた。

「キミたちは、自分は英語がヘタだと思っているだろう。でも、ホントはそうじ
ゃないよ。キミたちは、日本語もヘタなんだ」

「何言ってんだ、このジジイ」と、その時は思った。意味が分からなかった。で
も、その「ジジイ」になった今、私はその言葉を痛感している。

言葉で明確に何かを伝えるのは本当に難しい。読書感想文のような、高密度の複
雑な感情や思考を、説得力を持って相手に正確に伝えるなどということは、本当に
至難の業だ。今回、読書感想文に取り組んだ皆さんは、少なからずそのことに気付
いたのではないだろうか。言いたいことが強くある人ほど、それをどのように書け
ばよいか悩み、そして自身の表現の稚拙さを嘆いたのではないだろうか。

自分の日本語（中国語）、いや言語表現が、自分の大切な思考や感情をもっとも効
果的に伝えるものとして機能していない、そう気付くことこそが、若い皆さんにと
って最も重要なことだと、ジジイは思う。

優秀賞

捨て去られた愚民たちの抗争 — 『立喰師列伝』の世界

未来創造学部 国際教養学科 2年次生 楊 恩宇



書名 立喰師列伝

著者 押井 守

出版社 角川書店

かつて「立喰師」という職業があった。今はほとんど姿を消しているが、戦後から高度成長期にかけて活躍した立ち食いのプロである。香具師が活躍した戦後の混沌時代、時を同じくして「立喰師」は生まれた。言葉巧みに店の主人を言いくるめ、金を払わずに去る、これが立喰師の真髓であった。詐欺師とほぼ同じだが、実利を目指さず、単純な食欲を満たすだけである。ただの食い逃げとも違う、「芸術」の域に達する話術によって食う。“さっと食って、さっと出る”という、“味わう”より“食べる”ことに重点を置く。ほとんどの立喰師は現在で言うファーストフード、当時の立ち食い蕎麦屋で活動し、そしてその痕跡を一切残さずに、闇夜に潜っていった。

もちろん、そんな職業があるわけがない。仮にあったとしても犯罪者として警察に逮捕されてしまう。著者の押井守は、この架空の職業を通じて、日本の戦後史を描こうとした。敗戦、東京オリンピック、高度経済成長とバブル崩壊という、光と闇が並存する時代の流れを、立喰師という刃物によって切り開き、その中身を白日の下にさらそうとしたのである。

月見の銀二、ケツネコロッケのお銀、泣きの犬丸、ひやしタヌキの政、牛井の牛五郎、ハンバーガーの哲、フランクフルトの辰、中辛のサブ…、これらの人物は一瞬で燃え尽きる流れ星のような人生を送った。立喰いの「啓蒙者」と言われた銀二は、当時よくいた元軍人の一人である。「説教」を武器に、蕎麦屋において一人の戦争を貫いた。その精神を伝承したお銀は、自分なりの手段を使って反抗を続けた。東京から追い払われた犬丸はオリンピックという悪夢を抱え、あっちこっち号泣しながらかけ回った。時代の渦に彷徨っていた政は、死を以て自己否定を実現した。牛五郎とその後継者である哲は、自らの力で巨大な資本主義に挑戦し、成功した。高度経済発展した社会と墮落の間で彷徨っていた辰は、母にまで憎まれていた。インドから日本に戻ってきたサブは、理解不能な姿になった故郷に叛くように、立喰いの世界に落ち込んだ。

彼らは社会に対して何かしらの不満があり、自分なりの手段 — 立喰い — で反抗を試みた。しかし彼らの闘争は、大衆に認められなかった。なぜなら彼らが、大衆から出ながらも大衆を裏切ったからである。彼らの闘争は、大衆を狙い、大衆の利益を奪った。それゆえに母親は「あたしの息子なら、恥ずかしくてあたしに電話なんかできる筈がない」と沈痛な声を上げるのである。では、彼らはどうすればよかったのか。孤立した立喰師と、世の中でアリのようにコツコツと働く民衆たちは、自分の手で作り上げ、希望を抱いた国家に騙され、捨てられていた。

真実とは、いったい何なのであろうか。立喰師たちは、その真実を探し出すために闇に立ち向かい、そして絶望の奈落に落ちていった。大衆は覚悟を持たず、ただ“愚鈍”になっただけである。彼らは大衆を代表して、その闇に立ち向かい、戦ったはずであった。英雄と称されてもおかしくなかったはずである。しかし結局は大衆の敵になったのである。

本を読みながら、私は自分の祖国、中国のことを思い出さざるを得なかった。中国は今著しく発展している。GDPといい国際的な評価といい、中国の大衆は胸を張って歩いている。しかしその成長にどれほどの対価を払ったか、心の奥では理解しているはずだ。2008年はオリンピックが中国で開催され、繁栄した

風景を全世界に見せつけた。しかし、あの風景は真実だったのだろうか。中国に月見の銀二がいれば、「結構な景色だ」と言うだろう。それほど似ているのだ、あの時代の日本と。

社会の発展には、必ず犠牲が付きまとう。歴史を作り上げるために、我々は甘んじて命まで捧げられる。ただしこの純粋な努力は、常に不純な動機を抱いている他人に利用されている。このウソ、裏切りが溢れる世界で我々が望むのは、ただ割り箸のように使い捨てられたくない、それだけである。しかしこれは、もはや贅沢な妄想になっているのかもしれない。たとえ歴史が愚行によって積み上がったものだとしても、我々には各自の悲喜がある。

これは私にとって、実に難しい本である。辞書があっても調べられないものがいっぱい存在している。日本語だけでなく、この本は「濃い」、この本の味は濃過ぎるのだ。

優秀賞を受賞して

楊 恩宇

自分が受賞したことを知ってすごく驚きました。何故なら、私が読んだ本は私にとって全くわかりづらいものでした。内容はともかく、文法や文字なども調べても見当たらないものも沢山あります。でもそのおかげで、昔知らなかったものも知るようになりました。これからも、この勢いで頑張って留学生生活を充実しようと思っております。



編集後記

中国の楊貴妃は、『資治通鑑』によれば、またいとこである楊国忠の謀反に関する無実の罪に起因し命を失ったそうです。物事を判断する前に事実を確認することが必要です。ライブラリーセンターの図書・資料を大いに利用してみたいかがでしょうか。

(柿 木)

CONTENTS

	頁
○ 読書感想文コンクールによせて	1
○ 入賞作品	3
○ 最優秀賞、優秀賞感想文	4
○ 審査委員から一言	5



北陸大学
HOKURIKU UNIVERSITY

北陸大学ライブラリーセンター報
NO.28

平成22年3月12日発行

編集・発行：北陸大学ライブラリーセンター
〒920-1180 金沢市太陽が丘1-1
TEL. 076-229-3021
FAX 076-229-4850

ライブラリーセンターEメール：tlib@hokuriku-u.ac.jp
北陸大学ホームページ：http://www.hokuriku-u.ac.jp/

印 刷：カンタ印刷株式会社